

あとがき

本論文は性行為における自己の変容を、知覚をともなう現象と、性行為が相互行為を通じ既存の言説と関わる側面からとらえ、曖昧であった女性の「自己」を確認し、男性により構築されてきた自己の言説と異なる事実を踏まえつつ、身体の高様性を認める視点から近年主張されている「女性の人権」の意味と今後の方向性を述べたものである。

当初は前半部の自己についての考察が研究の大半となる予定であり、研究を始めた当初から、性行為における現象と理論の有機的構成の把握を目指し、探っていくうちに何かが見つかるだろうと楽観的に考えていた。しかし研究を進めていくにつれ、現実に目の前に横たわるのは、観念と現象が寸断されたまま散らばる多数の言説であり、それらのうち統合されているように思えるものも男性中心的な人間観から描かれたものが多く、自己構造の理論的解明の前に、まずはこの分断し偏重された言説群を整理する必要に迫られた。その上、女性学には既存権威からの「それは学問ではない」という批判が常に付いて回る。女性学においては、その権威批判として家父長制批判や男性中心主義批判が長い間行われ続けているが、筆者の立場も例外ではなく、発表した内容に対して「何を言っているのか分からない」という根本的批判がしばしば寄せられ、それら根本的な価値観の相違を説明する必要性を痛感することとなった。本稿の男性中心主義に対する説明は、その問いへの回答を常に考え続けた結果として行ったものである。

「人権」については、当初は女性の権利と関係ない視点で研究を行っていた。特に問題を抱いていた疑問は、この限られた環境のなかで、さまざまな人や動物が生き、そこに生命が存在するのに、どうして近代社会は、それらを軽視する構造を有しているのだろうかという点であり、わたしの人権への問いは、現在一般的に「バイオエシックス」の中の「環境倫理」的な視点から発しているものであった。だが近年のバイオエシックスに対する、環境倫理や生命倫理とで、それぞれ違う原理が存在しているという解説に納得できず、それらに共有されている縦系は何かと考えている内に、それが人権であることに気がついた。

当初は、あまりなじみのなかった「人権」を扱うようになり戸惑っていたが、「人権」から逆に眺めたとき、いかに女性の自己や身体が放置されてきたかを実感することとなった。

そして本研究は、結果として人権に女性の身体という横系を通した平面を示すことが課

題となったものである。

これら研究の変遷で述べたように、どの領域に焦点を当てればよいかというのが、研究当初からの私の最大の悩みであった。だが、本論文を書き終えた今、ようやく着地点となる地上を示すことができた気がしている。この論文を書き終えた今、今後は、地上を一つずつ整え、性差別に対する地図を描きつつ、その上の構築物を女性の立場からとらえ直す作業を目指したいと思っている。

本論文執筆にあたり、多くの方々にお世話になった。研究指導にあたっていたいた浜口晴彦教授、著者の修士課程時代にご指導いただき、人権論を扱う契機を与えてくれた木村利人教授、551教室で常に励まし、相談に乗り、アドバイスを与えていただいた人間総合研究センター荒井浩道助手、修士課程以来の同級生として、また共同研究者として励まし、惜しみない助力を注いでくれた河原直人人間総合研究センター助手、ゼミで刺激を与えてくれた同級生や諸先輩の方々、そして、早稲田大学人間科学研究科。当研究は、その内容からして、本研究科でなければ完成させることができなかったであろうと思う。このような「学問らしくない」発想を、修士課程で曖昧な説明に終始していたころから受け入れ、育てていただいた、本研究科の包容力と、その学問的意義に心から感謝の念を示したい。